憎いということを追及する

karinomaki

憎い

私は今、絶望の中にいます。自分が憎くてたまらないのです。この著書は、自分を救済するために書いています。

先生

私は精神病患者です。周りの人の気持ちを破壊するときがあります。しかし、自分が悪いとはどうしても思えません。何故なら、私の心を憎しみでうずめたのは両親だからです。

私の母は、一度も私を育ててはくれず、仕事にあけくれていました。父は内科医で、私は父を愛していたのですが、自殺しました。

しかし、私の父への愛はゆがんだ形で再現しました。父にそっくりの精神科医の先生が私の主治医になったのです。私は無我夢中で先生を愛し始めました。しかし、先生はいつも私に厳しい態度をとり、「君が病気になったのは全てを周りのせいにしたからだ」と責めました。

私は未だに先生のあの言葉が頭からはなれません。何度も死にたいと思ったくらいです。

しかし、涙にあふれる目で、どれだけ先生をうらめしいと思っても、先生は父の生まれ変わりであるという妄想がとれないのです。

死にたい

私はもう死んでしまいたい。でも、死ねない。死んで先生を苦しめたいのに・・・。私のゆがんだ愛は、心を今ズタズタにしているところです。

そして、私は思うのです。悔しいのに心の奥底でわかっているのです。私は激しく憎むことで先生を愛しぬいているのだと・・・。

どうして？

どうしてこのようなことが起きるのか。それは父が死んでしまった傷です。私は自殺することで、先生に、父に、私の愛の深さと傷をわからせたいのです。

先生は精神科医だから私と向き合ってくれました。しかし、私はもうボロボロの心をこれ以上かかえられない。先生に父を返してくれと叫びたい。先生は父ではないのに・・・。

憎しみについて

何故、憎しみは愛と表裏一体なのか。それは、愛されなくて、責められて、相手をとがめたいからです。本当は、人は愛してほしくて返ってこなくて人を憎むのです。

私は何度も先生から逃れようとしています。主治医を代えてほしいと何回思ったかわからない。でも、先生は、父であるという思い込みがなおらない。

父が、私を診てくれていると思うと、先生が憎くて、そして愛しくてたまらない。そんなゆがんだ心を持つ自分を、倒錯した愛ごと、殺したくなるのでした。